

沖縄県医師会 おきなわけんいしかい 1956年(昭和31)11月、*琉球政府により認可設定された社団法人。当初、沖縄医師会としてスタート、復帰後名称変更。医道の高揚と医学医術の発達・普及および公衆衛生の向上をはかり、社会福祉の増進に資することを目的とする。医療の普及・充実のほか、医事衛生の調査研究・医師の補習教育・医学経営の改善などの事業をおこなっている。各地区には支部として地区医師会がある。82年9月現在の会員数約720人。会長大浜方栄。事務所は浦添市当山。

〈上地兼恵〉

沖縄県遺族連合会 おきなわけんいぞくれんごうかい 第二次世界大戦の戦没者遺族の全県的組織であり、日本遺族会の支部団体。

【沿革】1952年(昭和27)2月10日、〈琉球遺族会〉が結成される。同年5月那覇日本政府南方連絡事務所が設置され、事務官が〈戦没者死没処理並びに遺族援護事務開始〉の準備を始めた。同年11月16日、〈第3回遺族大会〉を開催し、〈琉球遺族連合会〉に改名すること、事務局設置と各市町村遺族会を結成することを決議。53年4月、「*戦傷病者戦没者遺族等援護法」の沖縄適用にとともに、琉球政府社会局に援護課が新設され、各市町村にも援護係が配置された。遺族連合会事務局では援護法の内容を説明すると同時に各市町村遺族会結成を促進した。同年10月、日本遺族会に正式加入が認められ、その一支部として位置づけられた。54年11月、〈財団法人沖縄遺族連合会〉に組織変更し今日にいたる。



琉球遺族連合会創立当時の事務局員

【活動】遺族連合会が推進してきたおもな活動内容は、①*学徒隊および戦争協力戦没者にたいしては軍人、軍属同様の処置を取ること。②*一家全滅家族を供養する者にたいし、弔慰金を支給すること。③旧日赤救護員・徴用者・*女子挺身隊員・*満州開拓青年義勇隊員・特別未帰還者の戦没者遺族に遺族年金を支給すること。④靖国神社は国家で、*護国神社は県で護持奉賛すること。⑤遺族の家(くろしお会館)の建設。⑥外地戦没者の遺骨収集、遺族の戦跡巡拝にたいする助成、戦没者の*慰霊塔・墓地の整備をはかること。⑦対馬丸遭難学童および付添者として乗船死亡した者を準軍属として処遇するこ

と。⑧沖縄の霊域を国において管理すること。⑨沖縄戦戦没者の遺骨を早急に完全収骨すること。⑩政府は憲法解釈を確立し靖国神社公式参拝を執行することなどである。○沖縄県遺族連合会『還らぬ人とともに』(1982)。→沖縄戦

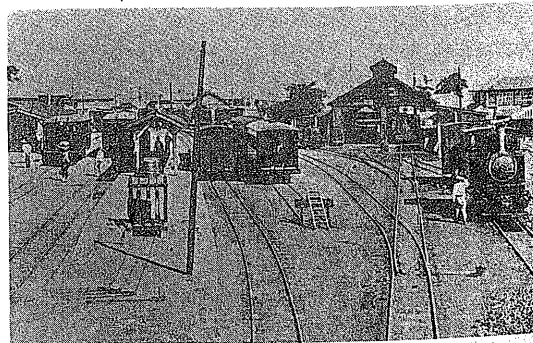
〈石原昌家〉

沖縄県医療福祉センター おきなわけんいりょうふくし—— 県民の健康保持に必要な医療の提供と医療従事者の資質の向上をはかるため、1977年(昭和52)4月、県が設置。管理は〈財団法人沖縄県医療福祉センター〉に委託されている。日曜日にも外来診療・検診がおこなえる一般診療所と、准看護婦が働きながら看護婦資格を取得できる定時制看護学校を開設したほか、医師・*介輔・看護婦など医療従事者の研修をおこなっている。事務所は浦添市当山在。

〈伊波茂雄〉

② 沖縄県営鉄道 おきなわけんえいてつどう 沖縄県によって経営されていた鉄道。1914年(大正3)の創業で45年(昭和20)の初頭まで営業。与那原線・嘉手納線・糸満線と海陸連絡線(那覇駅—那覇港)があり、全延長営業距離48.03kmにおよんだ。1913年2月政府の特許をうけて、県は企業に着手した。最初の敷設は与那原線とその延長である海陸連絡線であった。与那原線は那覇—与那原間の9.76km。14年1月に着工し、同年10月竣工、12月2日に営業を開始した。費用の30万円は県債で支弁。嘉手納線は20年4月に着手され、22年3月に竣工、3月28日に営業開始、営業距離22.45km。建設には108万7759円を要し、うち89万7898円は国庫補助、残額は県債県費で支弁した。糸満線は22年8月に着工し、23年6月工事をおえ、7月11日から営業を開始、営業距離15.1km。費用63万円は全額国庫補助。*沖縄戦で破壊されるまで陸上の貨客輸送の要であった。駅数30。43年初めの車両数は118(うちガソリン客車6)、従業員302人。

〈金城 功〉



那覇駅構内(昭和初期)

「沖縄県屋外広告物条例」 おきなわけんおくがいこうこくぶつじょうれい <美観風致を維持し、及び公衆に対する危害を防止する> ために制定された「屋外広告物法」(昭和24年法律第189号)のいわば実施規定。1975年(昭和50)7月制定。81年3月には規制基準が一部改正さ

れ、形制対象自由を対し、

沖縄! ちょう 46号で 七島お なりよ 島制度 が字と 区長、 は知事 は郡長 におお 歳以上) る程度 町村を らべ 20年(縄県史

沖縄 よ 「沖縄 づい で消滅 縄県行 に 査所 者の *地場 してい

沖縄 うい 職員 教育 会は 断、 全国 区大 (全日 るほ 小中 てい 仲本 (1982

ひきいられた
つぎつぎと各
という。筒腰
などの話が著
が伝わって
農繁期の虚を
追いつめた
あって目黒盛
失った。ここ
黒盛のものと
、今の与那覇
〈砂川明芳〉

山民謡。与那



山民謡

森田孫栄
ハ宮古城
遺跡。1981
丘地に形成
工事でその
貝殻、*スイ
の他クジラ
時代遺跡と
可能性があ
遺跡である。

〈下地和宏〉
南にある海
船着場があ
海と美しい
て知られて
左渡山正吉

1949年(昭和
24)前は現農

協付近にあった与那原駅と那覇間に*軽便鉄道が通り、材木・薪炭を運ぶ*山原船が寄港する港町として活気を呈した。今も海岸通りの材木商店街に海上交易の面影を残している。1945年(昭和20)ごろ米軍の物資集積場として接収された。その後割当土地となり、井然とした市街地となったが、地籍の確定が困難で、地域の発展を妨げている。伝統行事の与那原大綱引は有名。人口9873。

〈中村倫子〉

- 与那原遺跡 よなばる(ドゥナンバル)いせき 与那原島の南東側、南帆原の俗称ドゥナンバルチディと呼ばれる丘に形成されている八重山先史時代第3期の*遺跡。南帆原は周囲が微高地になっているため盆地状を形成し、現在、天水田や畑地が開けている。この低地には小丘が数カ所みられるが、この小丘を中心に200m四方にわたって*八重山式土器・*南蛮・*青磁・*黒磁・*勾玉・*梓状叩き石などが採集される。この一帯は旧部落跡と伝えられており、現在でも*石垣遺構とトニがある。トニの付近にはサギダ、ミナガタと呼ばれる田畑が残っている。

〈新田重清〉

- ◎ 与那原海岸 よなばるかいはん 沖縄島南部東海岸の与那原町字与那原にあり、近年埋立てや堤防の建設などで、海浜部分がせばめられてきている。以前は、那覇の*波上海岸とともに海水浴場として利用されていたが、周囲の都市化にともない、生活排水などの流入によって汚染がひどくなり、海水浴は禁止されている。

〈我那覇念〉

- ◎ 与那原街道 よなばるかいはん 首里-南風原-与那原を結ぶ*街道。1885年(明治18)に改修された。*与那原港に陸揚げされた地方の物産を首里・那覇に運ぶ主要な道路であった。しかしのちには、*佐敷街道の一部(那覇-国場-宮平-与那原)が与那原街道と呼ばれるようになる。佐敷街道が*県道に編入され、同ルートに*沖縄県営鉄道の与那原線が開通したためであろう。

〈金城 功〉

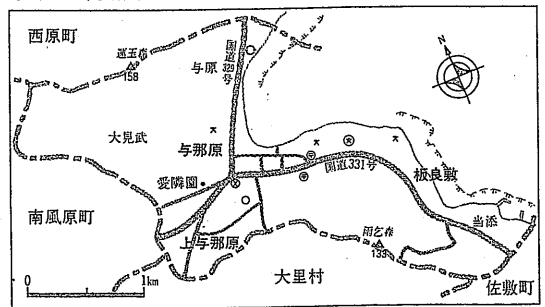
- ◎ 与那原港 よなばるこう 沖縄本島島尻郡の太平洋側にあった要港。今では与那原港といっても船の出入りはないが、戦前は本島の太平洋側に面する村々を結ぶ船の出入りする港で、その村々で生産される物資の集積場所であった。生産された物資は、*山原船で与那原港に運ばれ、陸揚げされ、そこから首里・那覇へと運ばれた。物資の交流する場所である与那原の地には、いち早く*荷馬車を所有して運搬を業とする人々が登場した。*沖縄県営鉄道が最初に開通したのも与那原と那覇を結ぶ線であった。それは与那原港に集められる物資をいかに早く那覇に運送するかということと関係があったと思われる。与那原港は日本海軍の軍艦の寄港地でもあり、大きな船の寄港でにぎわった。与那原港に上陸した人々を那覇へ輸送するためにも鉄道は必要であった。

〈金城 功〉

- 与那原層 よなばるそう 沖縄島の鮮新世にできた海成層。マクニール(1960, 英文)が、*島尻層群を細分したさい、上部を新里凝灰岩部層、下部を与那原粘土部層とした。この下部層をさらに二分し、その上部の粘土・シルト質層にたいし、沖縄天然ガス研究グループ(1971)が命名した。岩相から3部層に分けられ、上部は灰色～緑灰色のシルト質粘土からなり、ときに砂や火山灰を夾有する。中部は、浮石片に富む緑灰色シルト質粘土で、全層にわたって薄い火山灰層を挟み、下部はシルト質粘土と細粒砂からなる。模式地は与那原町付近。*中琉球の島尻層群の主体をなすもので、沖縄島の南部の大部分、*与勝半島やその周辺離島に分布する。層厚およそ900m。巻貝類・*二枚貝類の貝類化石・*有孔虫化石・サメの歯・魚の鱗や耳石、それに植物片や炭化木を産し、厚さ十数cmの石炭層も数枚夾在する。最下部付近には、スランプ層が存在する。

〈大城逸明〉

- ◎ 与那原町 よなばるちょう 沖縄島南部に位置し、*中城湾に臨む面積4.01km²の商業機能を有する地方都市。北側は西原町、南側は佐敷町と隣接して海岸低地に市街地を形成し、西側の大里村と南風原町から連続する丘陵地には農村集落が散在する。1949年(昭和24)大里村から行政分離し町制を敷く。世帯数3288、人口1万2861。戦前は*山原船の着く港町であり、東海岸側の*国頭村・東村・旧久志村・金武町などから建築材・薪炭を買い受け、それらの地域へ酒・味噌・瓦など生活必需品を運ぶ物資の集散地だった。那覇間に*軽便鉄道、中南部へ軽便鉄道馬車・*荷馬車が連絡する陸海交通の要地でもあった。戦後はバス・トラックへの交通機関の移り変



わりとともに、那覇市の近郊としてベッドタウン化が進み、近隣町村を消費圏とする卸・小売業が定着している。町の南東に近海漁業をおこなう当添漁港がある。古くから瓦工場があり、最近はその伝統を踏まえてレンガ・陶器などの*窯業がさかん。

〈中村倫子〉

- 与那原節 よなばる(ユナバル)ぶし 琉球*古典音楽の楽曲の一つ。前の浜節・*坂原口説と組み合わせると*二才踊(前の浜)で奏される場合は、次の*琉歌2首が続けてうたわれる。〈かれよしの遊びうちははれてからや夜

ヨナバルリ

ノアキテティダヌアガルマディン ヌヌアキテティダヌアガ
のあけててだのあがるまでも><夜のあけててだやあが
らほもよたしや 巳午時までや御祝しやべら>(めでたい
祝いの遊びにみんなうちとけたからには夜があけて太陽が上
がるまで遊ぼう。夜があけて太陽が上がっても構わない、10時12
時ごろまでも遊ぼう)。 <祖慶 剛>

与那原良矩 よなばる・りょうく 1718・6・29～17
97・10・23 (尚敬6～尚温3) *三司官、歌人。*唐名は馬
国器。詳しい経歴についてはわかっていないが、1762年
(尚穆11)には*進貢正使として中国へ行き、65年にはその
報告のため薩摩へ*上国している。『*大島筆記』(1763)
によると、吟味奉行に就いており、<経学に名あるは与
那原親雲上>とあって、のちに君子親方と称されたこ
とからも、和学よりもむしろ漢学で名をなしていたよう
だ。69年11月に三司官に就任、96年に辞任するまでじつ
に28年もこの職にあった。『*琉球球律』などの編纂も手
がけている。*沖繩三十六歌仙の一人で、『*沖繩集』に
<月下擣衣>(月下衣を擣つ)と題して

うつおとのたえだえなるは小夜衣

月にねられぬさきみなるらし

そのほか*琉歌も多く伝えられている。 <池宮正治>

与那原良傑 よなばる・りょうけつ 生没年未詳



*琉球処分期の*三司官。馬氏与那原
家の出。*唐名は馬兼才。父は三司
官の与那原良泰。処分前後、王府
きっての外交官としてたびたび上京
し、対政府折衝に当たった。1873年
(明治6)5月、東京への年頭慶賀使
(*在番親方)第1号となり上京。8月
外務卿*副島種臣との会見で、藩の政治は*国王に一任
し、国体制度は従来通り、との言質を得た。これは処分
進行の過程で対政府交渉の有力な拠りどころとなった。
75年2月、台湾遭害者への撫恤銀下賜の件などで政府から
出京を命ぜられ三司官の*池城安規とともに上京。内
務省で*松田道之から職制改革ほか5条の内達をうけた。
7月、松田の渡琉に同行して帰藩。76年9月、在京の池
城の対政府交渉などを援助するため上京。翌年6月、池
城の死去にともない在京のまま三司官に任職。この任職
は74年に三司官の任免権が政府に移されていたため、正
式には7月の太政官辞令をもってなされた。78年11月、
英米蘭各国公使への陳情をおこなっているが、政府の帰
藩の命を受け、翌年1月松田に同行して帰藩。同3月の
処分後は尚泰に随行して上京。東京詰の家令となり、*尚
家の侯爵家としての整備・発展に尽くすが、在職10余年
のち、病を得て帰島後まもなく卒したという。

<田名真之>

与那覇湾 よなはわん 平良市の久松から下地町に
かけて湾入する風光明媚な湾。潮干狩りの名所として知

られ魚介類が豊富である。現在東岸より湧出する地下
水を湾内に貯留し淡水湖にして農業用水に利用する開発
計画があり、賛否両論対立している。 <佐渡山正吉>

与那節 よな(ユナ)ぶし 琉球*古典音楽の楽曲の一
つ。本歌<与那の高ひらや汗はてど登る 無蔵に思なせ
ば車たう原>(与那の急坂は汗を流して登る大変なところであ
る。しかしとしい恋人と会うことを思えば楽なものよ)。*与
那高坂は国頭間切与那と伊地の中間にある。車たう原は
平坦な道。恋の道はすべての障害をはねのける。この歌
には<二人連れで登る>意味もあるといわれるが、ほか
に同意の替歌が数首ある。 <宮城鷹夫>

与名間、よなま 大島郡天城町の字。徳之島に位置。
町の最北端にある。漁業がさかん。北部に花崗岩の奇岩
の林立する景勝地*むしろ瀬があり、観光客も多い。落
水海岸には海水浴場がある。人口432。 <松山光秀>

与那嶺 よなみね 今帰仁村の字。村の北西部、東シ
ナ海に面して位置。耕地にめぐまれ、集落はその中心に
ある。およそ1kmも続く与那嶺長浜付近には、保養施
設・ホテルが建設され、観光客も多い。与那嶺遺跡や
*仏ン当貝塚がある。サトウキビ作中心。人口387。

<田港朝茂>

与那嶺松助 よなみね・まつすけ 1910・7・12～19



73・7・30 (明治43～昭和48) 教育者。
今帰仁村渡喜仁に生まれる。*沖繩
県師範学校二部をへて、1935年(昭
和10)広島高等師範教育科を卒業。
41年広島文理大を卒業、*沖繩県女
子師範学校、第一高等女学校教諭と
なる。*沖繩戦では*ひめゆり学徒隊
とともに戦火をくぐりぬけた一人として知られる。戦後
は*沖繩文教学校教官、高校長などを歴任、50年*琉球大
学の開学と同時に同大学心理学担当助教授となる。米国
留学ののち教授となり、54年から教育学部長、61～64年
の多難な時期に学長をつとめる。権威主義的パーソナリ
ティーに関する研究などの論文がある。73年4月、*沖
繩心理学会の初代会長に就任したが、同年病没。その業
績を記念して『与那嶺松助教授記念論文集』が琉球大学
心理学教室の編集により刊行されている(1981)。

<東江康治>

ヨナラバル遺跡 ——いせき 竹富町西表島東海岸
北部の美原部落の北端にある集落遺跡。遺構はヨナラ川
の河口に近い緩斜面に展開する。1978年(昭和53)青山学
院大学調査団によって発掘調査された。調査区域内では
建造物と関係があると思われる2本の溝が発見された。
出土遺物は、14、5世紀前半の製品と考えられる中国製
の*青磁・*白磁・青白磁・褐釉磁および八重山地方製の

褐黒色
片発見

与根
い沖種
ったか
どから
名だ
カ所の
菜づく

与根
いの干
地とし
られて

与根の
留者
まも
は原
てつ

米原
月、
村な
なく
のこ

米原
石垣
る石
落は
木層
シ林
り、
キュ
シ群
シイ
ンバ
m、
キ・